



TITLE:

統計拾穂抄(七)

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 統計拾穂抄(七). 經濟論叢 1927, 24(3): 600-606

ISSUE DATE:

1927-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128511>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷四十二第

行發日一月三年二和昭

論 叢

廣告稅論

教授 法學博士

神戸 正雄

ミルの社會學概念

講師 文學博士

米田 庄太郎

露西亞の新經濟政策と農業

教授 法學博士

河田 嗣郎

土佐の百姓一揆

教授 經濟學士

黒 正 巖

時 論

支那問題管見

教授 法學博士

末廣 重雄

說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田 島 錦治

琉球の慶長役以後

教授 法學博士

山本美越乃

雜 錄

日銀指數利用の一指標

講師 經濟學士

蜷 川 虎三

伊太利のリラ貨引上策について

經濟學士

松岡 孝兒

長週期景氣循環に關する一研究

經濟學士

菊田 太郎

梅雨考

教授 法學博士

財部 靜治

統計拾穗抄 (七)

財部 靜 治

一〇 梅 雨 考

「から崎や松かせたえて志賀の浦の浪におり
ある五月雨の雲」てふ千蔭の詠は、貧富争鬭を
律する萬國普遍の「科學」に、夏の別ちもなく
沈潜しつゝある、若人の心に如何にか映すら
ん、尙廣く極東季節風地域にある諸國の特色に
就き、觀する者或は曰く、「一エーカー當り最大
の穀物生産は、日本及支那に於て達成せられ、

稍之に劣れる程度に於て、印度及爪哇にても仕
遂げられたり、夫等地域の全部は、暖かき季節
を通じて降雨に富み、その人口は稠密なり、而
して是等諸國に於ける人口夥しきは、多分その
大なる食糧生産力に由來すとすべきも、產出さ
れたる食糧の殆んど全部は、國內の必需を充た
すの用に供せらるべき程度に、その人口も
亦夥し、從ひて是等季節風地帯の諸國は、世界
の他の部分に、多量の食糧を供給することな
し、事實上食糧の輸入は、その輸出に匹敵し、
又は之に超過すとすべからん」と、こは米國
Wisconsin 大學地理教授 Ray Hughes Whitbeck
が近年の著 Industrial Geography. Production,
Manufacture, Commerce (一九二四年版) 末章中世
界の大農産地方概論を試み、その劈頭に説ける
所なるが、本邦産業地理の特殊細目研究に没頭
する者よりせんか、その立説餘りに大綱に限ら
るゝを以て、或は望洋の感なきを得ざらん、兎
に角吾人は這般の觀想に接し、梅雨とはそれ何
ものぞ、又その本邦人文に及ぼす影響如何に關

する冥想腦裡に徂徠しつゝありしに當り、偶々河内の人蔀遊燕の著書「民間年中故事要言」七卷（大日本人名辭書によるに著者は和漢の學に精通し、特に故事に精し、元祿十即ち西曆一六九七年本書を著せり——藏書は二一年後たる享保三年の刻たり、著作年次につき疑を存するため併記す——數百部の和漢書を引照せしものにて、該博識くべし、故に此書今に至りて世益を與ふること多しとあり）を入手し之を一覽せるに、梅雨につき興味ある一叙説を含むことを知れり、かくて即興に驅られ、倉皇筆を馳せて蕪雜なる此一短編を草し、後日「科學的」に一層精密なる研究に就くの、一先驅に供せんと欲す。

前記要言によるに「五月ニ降雨ヲ梅雨ト名ク或ハ黃梅雨ト書テツユト讀マセタリ梅實ノ黃熟シテ落ル時ナレバナリ司馬溫公ノ詩ニ黃梅時節家々雨。文集ニ毛衣濕黃梅雨裴行ナド、云ヘリ。初學記曰梅熟雨江東呼曰黃梅雨。マタ徵雨トモ書徵ハカブルト讀字ナリ衣裳書籍ナドホシノ入テ微コト有レバナリ」とあり、その説明につき格別珍らしきものなし、而も亦是を「増補俚言集覽」中、「つゆの入」を「進梅、立梅、上

梅、天香樓寓得に吳楚以芒種之後壬日立梅、月令廣義に閩人以壬日爲進梅、雅俗稽言に南人以衣物黴黑爲上梅」と解釋せるに照し、又龔璠詩に「吳儂畏雨如畏虎、不道梅霖是時雨」とあり、唐明皇文に「喜麥秋之有登、玩梅夏之無事」とあること（縮刷手瀋九四七頁參照）稻作を主とせる我邦農民が、必ずしも所謂「カラツユ」を悦ばざると、稍その趣を異にするものあるを想ふと共に年内の此一雨期に對し、特別の名稱を附與するの風習は、由來支那少くともその一部地方にても行はれしことを認むるの外なく、又その人文に及ばず影響につきては、別に特殊考察々挿むの餘地あるを、思惟せずんば非ず、唯之が地學的比較研究に至りては、後日の精研を待ちて遂げんと欲す。

座右なる博文館當用日記本年分中、六月の諸氣節に就きて察するに、その一つとして「十二日入梅」と掲載せらる、然るに京都日出新聞の新年附録「日出家庭便覽」六月分には、十一（舊五月十二日）日入梅とあり、東京と京都と地を異

にするがために、本年の入梅期に一日の差を生ずすべきものなるか、吾人は先づ此疑問を挿むと共に、前記要言に引用せる具原篤信の所説に、多大の興味を惹かずんば非ず、即ちその文に曰く「損軒嘗著徽雨説曰陰陽之往來固有定期、然而天地之流行變化無窮故寒暑風雨之時候必有遲速不可拘以日數、然則梅雨出入之期雖出平華夏之書恐不可據信」只以芒種之後霪雨初降之日爲入梅以霪雨收斷之日（入梅後約一ヶ月）爲出梅（前にも引ける俳言集覽には、此以外に絶梅、梅盡、斷梅の諸名目を掲ぐ）庶幾乎其不差矣（十月液雨亦恐然也）と、氣象、曆數又農事につきても、讀書又經驗を積むこと淺からざりし、此古大學者の所説によりても、初夏に霖雨到ればとて、その始期は曆に一定せるが如く、定日に回歸するものに非ず、歳により地方により多少の相違を伴ふべし、されば隨時又隨處に事實に就き、之を吟味し實證すべしとするの主意、明かにせらるるべきに非ずや、之と共に初夏の候以外、シメヤカに降りつゝ、「妹と出てわかなつ

みにし閑ざきの根垣こひしき春雨ぞふる」（景樹）との、感想をも興さしむべき一雨季を始め、「ちりの世の人はしらしなはせを葉に雨の音さく秋のあはれを」（春遊）とも詠せしむべき秋霖（且つ降り且つ晴るゝ「秋ノシグレ」「秋ノムラサメ」等の語あるを注意すべし）あるごとに聊か言及せるは、その當時に於ける學者の通弊たりし、支那學說盲奉の態度を脱却せるものとして痛快なり、以下吾人の企圖する所も、本邦梅雨に就き少しく實證的考察を施さんとするに外ならずと雖も、その以前に注意しおきたきは、曆の梅雨節に關する、専門學者の一所説なり、即ち一戸直藏著「曆の話」（大正二年發行）によれば、「現今ノ日本曆デハ入梅ヲ太陽ノ黃經ガ八十度ニ達シタ日ニシテアル、サレバ大體五月節ノ芒種後五日位ノ邊ニ當ル、併シ以前ニハ芒種後最初ノ壬（水ノ兄）ノ日ヲバ入梅トシタモノデアル、此様ナ方法ハ、五行ノ運行カラ割レバ自然カセラル、モノデアラウ、但シ此様ニスレバ氣節トハ時ニハ十日モ相去ルコトガアル、」「實言フト入梅ノ日ガ必ズシ

モ劃然ト霖雨期ノ始メラ示スモノデナク、日本デモ梅雨ナキ地方モアルコトナレバ、餘リ入梅ヲ信用シ過ギル必要モアルマイガ、大體ヲスニ好都合」とあり。(同書六一、六二頁參照)

明治九乃至三三(一八七六—一九〇〇)年の二五ヶ

年間に於ける、中央氣象臺觀測によれる平均結果を、Chamberlain, Things Japanese. 5. ed. p. 97 に引用せる所によるに、降水量及降水日數(一耗の十分の一以上の降水を見たる日數、その中には降雪及降雹日數を合算す)は左の如し

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
平均降水量(吋)	二・四	三・〇	四・三	五・四	九・九	六・三	五・〇
降水日數	七・二	九・一	一二・四	一四・八	一三・三	一四・四	一四・一
八月	九月	十月	十一月	十二月	全年		
平均降水量(吋)	四・七	八・三	七・七	四・五	二・三	五・六	
降水日數	二・八	六・三	一三・一	九・〇	六・三	一四・六	

本邦全土の氣候は季節風地帶北東部に共通なるが如く、概して暖かにして濕氣及降雨に富める夏及秋と、比較的寒く晴朗なれど「木枯」強き長冬とを示す、而も亦半面より觀せんか、本邦國土蜿蜒長く南北に連亘し、熱帶の北邊よ

り、北極圈を去ること遠からざる地方に及べる、細長き蜻蛉洲を成し、又山嶽誌的地勢上地方により大相違を呈するがために、全國を通じ斷じて「氣候の和」 Gleichförmigkeit des Klimas ありとすべきことなし、寧ろ天地海陸の

「流行變化無窮」なるがために、右の氣候常例に對して著しき例外あり、特に四面海を環らし、加之暖流たる黒潮並に寒流たる諸潮流殊に親潮の、表裡相反せる影響を蒙るがために、諸地方氣象殊に降水現象に特殊の大相違を呈せしめ、數里を距つるに過ぎず、又殆んど同一緯度に位せる諸地方間に於てさへ、之を窺はしむ、即ち赤道附近に發せる黒潮は、支那沿海を流れ來て、本邦南面の諸沿岸を洗ひ、その餘勢は遠く北緯約三八度の地方迄及ばされ、その西支流たる對馬海流と相待ちて、寒暑乾濕動搖圈の兩極を、緩和縮少せしむる點に著しく影響し、黃海日本海の西に面せる、大陸諸國に比すれば、夏季清涼にして冬季溫暖なり、又一年中を通じ遙かに濕氣に富む、之に反し寒流としては

親潮及 Okhotsk 海流の二あり、前者は堪察加近海に起り、北海道及本土の東岸を沿ふて南流し、犬吠岬附近に至りて黒潮と會す、後者は黒龍江の河口附近に起りて、更に二海流に分たる、その一は樺太島の北端を廻り、同島東岸を沿ひて南流し、その一部分は日本海に流れ入るべき樺太海流にして、他は樺太と西伯利亞との間なる、韃靼海峡を南下し、北海道及本土の西海岸を洗ひ、餘波遠く香港附近迄及ぼさるべき Linna 海流なり、かゝる反對の潮流あるため、複雑なる氣象現象を呈せしむべき、數例證を擧げんに、西班牙の首府 Madrid を、殆んど同緯度に位せる東京の冬は、濕りて冷かなるも、日照を見る限り、寒氣凜烈と稱せらるゝ能はず、更に南の方數哩を距てたる、葉山及鎌倉附近に至れば、歐人の避寒地たる伊太利の Riviera と殆んど同様に、溫暖なりと説かれ得べし、東京に於て小降雪を見ることあるも、急に又解く、然るに本土中央山脈の北西斜面に當り、日本海に面し之を距て、西伯利亞に對立せる地

方、假令ば越後及信濃にありては、寒流の影響著しきものあり、積雪數尺に及び、又數週に亘りその狀態を續く、而して同一地方に於ける諸都市の夏は、東京の夏同様堪へ難く暑し。U. J. Rein, Japan nach Reisen und Studien, I. Bd. Natur und Volk des Mikadoreiches, 2. Aufl. 1905 S. 154; Arthur Lloyd, Every-day Japan, 911 p. 3; Japan in the Beginning of the 20th Century, pp. 4. 4. 小田房吉著日本氣候學、明治三十五年三版、特に二一八頁以下參照

右の如く寒暖相反せる潮流は、錯雜なる影響を及ぼすすべきのみならず、本邦西北部は僅かに一葦帶水を隔て、廣大なる亞細亞大陸に接し、大陸氣候の影響を蒙ることも甚大なり、夏季は溫暖なる南西風多きに反し、冬期は乾燥寒冷なる北西風に、吹拂はるゝを以て、(前出口本氣候學三二頁參照) 大體上夏と冬の氣候上に於ける背反は、島國たる本邦に於ても亦可なり甚大なるの結果を呈すると共に(熱帶部熱帶地域にある臺灣、琉球、小笠原島は之が例外をなす) 各月に於ける降水の時間的配分に就きても、著しき相違を呈せしむ、こは前記の略表を一瞥して、直ちに

看取し得べき所なり、春は陽氣なるを可とすべきに、頻繁なる強風と共に、濕りたる陰鬱に邪魔せらるゝ日は多し、之がために櫻、藤、牡丹、芍薬、躑躅、花菖蒲その他の花を、眺め娛むことを妨げらるゝこと多し、このことたるかの六月中旬より七月中旬に至る迄、「温暖多濕なる南の風北進して、特に退かんとする北の風と混亂し、且邦土の中央に横はれる山脈に衝突し、其積載する濕氣を凝縮せしむる結果」として、惹起さるゝ梅雨（前出日本氣候學三一〇頁参照）季節の降雨と、春季の降雨とを統計上比較して、直ちに實視し得べきことたり、而して又梅雨の豫斷に確信をおける俗人には、或は意外と感ぜらるべき事實たり、前記略表の示す所によるも、四月より七月一杯に至る迄は、約一日置きに降雨あり、その兩翼の月たる三月及八月は、平均毎三日に一日以上の雨天あり、而して又九月及十月に至れば平均雨天日數は、再び毎二日につき約一日に上り、梅霖以外秋霖の回歸あるの事實は、簡單なる右の計數上明かに示され、結局俚

諺上月に叢雲花に風と謂ふも、故なきに非るを察せしむ、その間七月の後半及八月一杯は暑くして濕氣尠きも、雨は寧ろ臨機の暴風雨（新井白石の東雅によるに「暴風をアラシといふは、暴の義也、我國の俗、風の字を讀でアラシといふ、此字もと山氣の蒸潤をいひて、迅猛の風をいふ事、もとこれ楚語に出づ」とあり、卓見とすべきを想ふと雖も、之が嚴密なる吟味を後日に譲る）として降り、一日乃至三日間持續し、之に次いで清明の天氣に變る。要するに梅雨が過信し、本邦雨期は初夏に限らるゝ如く輕斷するは、誤りなるべしと雖も、此雨期に特別名稱を付し、之を他と區別するを以て、一の迷信視することは當らずとすべきに似たり、蓋し此季節には陰濕なる空と、一年中先づ初まれる暑熱と、重り合ひて凌ぎ難く、仕事を不可能ならしめずとするも、之に飽き易からしめ、又濕氣透徹的に強きため、如何に注意するも事物に微をわかしめ易き特色あればなり。

降水量及降水日數が本邦各地方間に於て、著しき相違を示すべきは、以上説ける所によりて

も明かなる所にして、之が統計的研究は梅雨考の目的よりするも、輕現すべからざる所なり、

(Murry's Handbook for Japan, 7. ed. 1903 pp. 8, 9 に本邦降雨に關する一地圖表を挿み、年雨量六百耗以下及三千耗以上なる二地方以外、その間二百耗別に均分せる九等級別雨量の地方分布を、點の粗密及濃淡により示せるは、便覽の目的に相當に適せり、此點につき本邦農事研究上、貴重なる一文獻視すや、Max Fesca の地產要覽圖 Agricultural Production of the Japanese Empire, Atlas, 1890 IV 中、氣候學の大家 Julius Hann, Über die Temperatur-und Regenverhältnisse des Japanischen Inseln. Petermann's geogr. Mittheilungen, 1888 Tafel 17 より引用せる、明治一六乃至一九の四年間平均全年雨量を、二色及び等雨量線により示せる地圖表は、かゝる研究の一模範に供し得べし)されどその目的上近刊統計年鑑等に、主要測候所月別降水量並降水日數及創立以來の累年平均として、示さるゝ計數を茲に單純に摘記するが如きは之を避け、「世界の新人」印度 Lucknow 大學教授 Radhakamal Mukerjee (本誌第十六卷三七三頁參照)が、Patna に於てなせる講義を土臺として、公刊せる近著 The Rural Economy of India, 1926 pp. 14, 15 に引ける Walter Weston, the Geography of Japan,

National Geographic Magazine, July, 1921 の本邦氣候觀を、紹介しおくに止めん、即ち惟へらく本邦國土の最大特色とする所は、山に富むことなり、山地とすべきもの島國境域の四分の三を下らず、その大部分は不可耕なるが故に、未耕なり、されど殘餘の四分の一は、實に驚くべき細心の注意と、孜々たる精勵とにより耕やさる、かゝる苦しき生存條件は、儉約、勘忍及自持の習慣を生み、大に百姓の分限を高むることなれり、茶、絹及米の生産の如く、多大の勞働を要すべき職業並に手工業は、この質素勤勉なる國民間に、完全に發達せり、又日本の諸氣候事情は、同一面積の他の何れの國に比するも、著しき不同を示し、その山の形狀及構造は非常の變化に富み、その景色に雅致ある優美を伴はしむるを以て、その國民をして快活ならしめ、感動性及美術心に富ましむと。